

江戸の名主文書『重宝録』について

小林 信也

はじめに

近世江戸町方の名主が残した記録とされる『重宝録』については、東京都公文書館の編集により二〇〇〇年一〇月に第一巻が東京都から翻刻刊行された。全六巻が予定されている。二〇〇一年一〇月には第二巻が刊行された。『重宝録』の原本は東京都公文書館が所蔵している。同館における原本請求番号は「CK―七七九〇八〇四」で、マイクロフィルムの請求番号は「江―随筆類―〇二四―〇二六」となっている。

右に紹介した刊本『重宝録』第一巻の「はしがき」において『重宝録』の概要は次のように紹介されている。「内容は、町触などの法令類、町奉行所からの問合わせへの答申、町入用の書上、小間書上等のほか、町会所関係、町火消関係、産業経済関係、各由緒書など多岐にわたる。なかでも、深川地域についてはとりわけ詳細な記録が含まれ

ており、興味深い。深川地域は、関東大震災、東京大空襲、そのほか火災・水害などの災害によって大きな打撃を受けた地域である。そのため、重宝録は数少ない深川地域の史料として、江戸地域史研究の進展にとって意義あるものと思われる」。

これまで『重宝録』所収の文書を一部使用した研究はいくつか発表されている。また、『東京市史稿』などにも所収文書の一部が掲載されている。現在進行している刊行事業によってさらに利用しやすくなった『重宝録』が、今後、近世江戸に関する研究の基本史料としてその地位を高めることは間違いないだろう。そうした状況に加え、詳しくは後で述べるが、天保改革前後から安政年間にかけて江戸町方の行政全体において大きな役割を果たしたある名主の活動を『重宝録』が伝えていることにも注目すべきである。この事実は従来見過ごされていたが、これらの点からみて『重宝録』の史料価値は高いといえる。

ところが『重宝録』についてはその成立過程などを検討する作業が

これまで見当たらない。編者が誰かということについても実は定説がない。一九二六年刊行の『深川区史』は、一九二一年に開催された深川史料展覧会の出展史料目録を掲載しているが、その目録には、東京府からの出展品として『重宝録』および後でふれる『寛永録』が書上げられ、『重宝録』の項目には「相川町名主相川新兵衛手記」という注記が付されている。⁽¹⁾この注記が深川史料展覧会の関係者によるものか、出展者の東京府によるものか、あるいは『深川区史』編纂者によるものか、確定できない。ともあれ、ここでは『重宝録』の編者が深川相川町の名主相川新兵衛であるというひとつの見解が示されている。ところが、一九五七年刊行の『江東区史』には次のように記されている。「深川の名主の中には著名な人もあった。ことに相川町方面の名主をしていた相川新兵衛らは寛永六年（一六二九）深川狹師町方面を開拓し狹師町を起立し、元禄八年（一六九五）に昔からの新兵衛町を改めて相川町とした。相川氏は開発以来同町の名主をつとめてきた。この家に伝わる寛永録七巻は狹師町起立以来の沿革やその他の明細な記録である。また代代熊井町の名主をつとめてきた熊井家にも深川ので誌や郷土資料として貴重な重宝録二十四巻があり現在ともに東京都の都政史料館に保存されている」。⁽²⁾このように『江東区史』は「寛永録」という文書が名主相川新兵衛家に伝わるものであるという見解を示す一方で、『重宝録』は熊井という別の深川の名主家に伝わる文書であるとしている。先の『深川区史』とは異なる見解である。『重宝録』所収史料を論文中で引用した曲田浩和は「深川熊井町名主家に伝えられたといわれる『重宝録』なる記録」と述べ、『江東区史』の説と同様の見解をとっている。他方、高山慶子は『重宝録』を「相川家文書」として位置づける。⁽³⁾⁽⁴⁾『江東区史』や曲田とは異なり、『深川区

史』の記述と共通する見解であろう。このように、従来、『重宝録』の編者については、名主相川新兵衛であるという見方と名主熊井理左衛門であるという見方の相異なる二つの見解がある。しかし、それぞれの見解が立脚する論拠はいまだ示されていない。

本稿では『重宝録』の内容を簡単に紹介しつつ、その編者が誰であるのか、という未解決の問題についても考察を行うことにする。

一、『重宝録』の概要

『重宝録』は半紙判の袋とじ縦冊で全二六冊からなる。ただし各冊の通し番号が墨書きの漢数字でもって表紙に記されているのは第一冊から第二四冊までである。残りの二冊について東京都公文書館の目録はこれらを「別冊」と称している。ただし、原本において特に「別冊」といった表記などがあるわけではない。「重宝録」という表題は「別冊」を含めた全冊の表紙左上に墨で記されている。一部の冊ではこの表題の下に副題が記されている。副題については後で紹介する。各冊の表紙を除く丁数は、最も薄い冊で墨付四〇丁、最も厚い冊で同一七五丁であり、冊ごとの分量はかなり差がある。各冊の丁数は後で示す。半面平均八行で書かれている。

全冊に二種類の貼紙がある。ひとつは現在の公文書館の原本請求番号を記入したシールで、表紙の右下に貼ってある。もうひとつは和紙に「式拾六」と記入したものである。この貼紙は『重宝録』第八冊を除いたすべての冊の表紙右上に貼られている。これは現在の公文書館における分類のために貼られたものではない。第八冊のみに貼紙がない理由は不明である。もともと貼られていたものがその後どこかの時

点で偶然剥離したのかもしれない。ともあれ、この「式拾六」の貼紙はかつて『重宝録』が属していた何らかの分類を示しているであろう。なお、現在、公文書館が所蔵する近世史料のうち『寛永録』（請求番号CK―八〇五）や『書留』（同CN―一六）、『御触町触諸達』（同CH―二四五―二五四）にも『重宝録』と同じ「式拾六」の貼紙がある。以上、二種類の貼紙の他に、『重宝録』の裏表紙の左下には一度貼られていたシールを剥がした跡がある。冊によっては完全に剥がしきれず破れて残った部分があり、その部分を読むと、これらのシールには万年筆で「史料編纂掛」と記入されていたと推定できる。同じシールの剥がし跡は、右に挙げた他の諸史料のうち、『寛永録』のみにおいて『重宝録』と同じ位置に確認できる。

また、『重宝録』全冊の裏表紙の内側に「相川蔵書」という朱の蔵書印が押されている。この蔵書印は右の『寛永録』・『書留』・『御触町触諸達』のすべてに押されている。

以上紹介した貼紙や蔵書印に注目すると、『重宝録』が、過去のある時期、『寛永録』・『書留』・『御触町触諸達』と一括されて取り扱われていたことはほぼ確実であるといつてよいだろう。『寛永録』は一九八六年から一九九〇年にかけて江東区教育委員会の編集で翻刻刊行されているが、その第一巻に掲載された解題で財部健次（東京都の市史編纂事業に従事、故人）は「大正の末期か昭和の初頭ごろ、当時東京市市史編纂事務嘱託員島田一郎（筑波）の手を通じて購入したものと伝えられている。」と述べている。購入先などは明らかにされていない。先に紹介した『深川区史』掲載の史料展覧会の記事を参考にすれば、『寛永録』の購入時期は同展覧会が開かれた大正一五（一九二二）年以前に遡ることになるだろう。『重宝録』がこの『寛永録』

と一緒に購入された可能性も小さくないと考えられるが、詳細は不明である。現在、東京都公文書館においてもこれら文書の購入の時期や経緯などは不詳とされている。

以下、『重宝録』全二六冊の概要を冊ごとに簡単に紹介する。なお、『重宝録』の中身の多くは諸書類の写で構成されている。以下の各冊の概要紹介においてはこれらがいちいち写であることをことわらない。第一冊（一〇七丁、表紙を除く―以下の各冊について同じ―）。「重宝録」という表題の他に「地面之部」という副題が表紙に記入されている。記録年代は元禄一四年九月五日付から天保一三年五月二〇日付まで。なお、ここでのいう記録年代とは、『重宝録』各冊に写が収録された文書に関して、年欠のものを除き、それら文書に記された作成年代のうち一番古いものと一番新しいものを示す。ただし、ある文書の中でそれ以前に作成された文書の全部あるいは一部が引用されている場合などがあり、それらの取扱い方によっては筆者が判定した記録年代とは異なる年代を設定することもできる。したがって、ここで示す記録年代はおおまかな目安として考えてほしい（以下の各冊についても同様である）。この第一冊は町触あるいは町奉行所宛の町役人返答書などを収録している。内容はすべて、副題どおり、土地の権利や売買手続などに関するものである。

第二冊（七一丁）。副題はない。記録年代は万治元年八月一六日付から天保一五年二月二日付まで。幕府諸役人による書付、町奉行所宛町役人返答書、諸々の由緒書などを収録している。内容は雑多で、「平人」作成の文書中における武家についての敬称に関するもの、人足寄場の沿革、名主勤方その他多岐にわたる。由緒に関するものがやや多い。町年寄とその手代、相撲行司、髪結、乞胸頭、穢多触頭、非

人頭その他の由緒書や身分調などである。

第三冊（八六丁）。副題はない。記録年代は享保九年八月五日付から天保一五年一〇月付まで。町奉行所宛町役人返答書、諸商人仲間の返答書および町触その他を収録している。内容はすべて十組をはじめとする商人仲間や廻船に関するもので、商人仲間の起立、冥加上納、廻船運賃などについての記録となっている。

第四冊（七〇丁）。「重宝録」という表題の他に「十七番小間異例之部」という副題が表紙に記入されている。記録年代は明和四年一二月二〇日付から天保一四年七月付まで。副題どおり、名主番組一七番組に属する町々（熊井町や相川町を含む深川地域の町々）の小間の書上（年欠）が冊の冒頭に収められている。ただし、この書上以外にも、副題とは関係なく、酌取・茶汲・芸者を置く深川地域の料理茶屋・水茶屋の書上や、防火目的の塗家造、七分積金、御用達の家作に関する町奉行所宛町役人返答書など多様な文書がこの第四冊に収められている。副題にある「異例」の意味は確定しがたいが、先の小間書上では、江戸町方中心部とは異なつて家作が可能な河岸地や町内の一部に存在する年貢地などといった、深川地域に固有の土地の扱いを特記する下げ札もいくつかが写し取られている。そうした特殊な土地の扱いを「異例」と称した可能性も想定できるだろう。

第五冊（八六丁）。副題はない。記録年代は文政一一年七月付から天保一三年五月付まで。種々の書上や町奉行所宛町役人返答書などが収録されている。内容は、御能の節の下賜品、国役勤方、御膳御肴上納、幕府入用橋に関するものである。

第六冊（一〇〇丁）。副題はない。記録年代は元禄一〇年一二月付から天保一五年二月一〇月付まで。種々の書上や町奉行所宛町役人返

答書などが収録されている。内容は雑多で、將軍御成の際の諸規制や番船勤方、深川獵師町の起立や諸負担、深川地域の名主（および名主見習や後見など）の就任退任、その他に関するものである。

第七冊（四〇丁）。副題はない。記録年代は慶安元年二月二八日付から文化七年一〇月二八日付まで。編年体で文書が収録されている。町触が主体で願書その他が一部含まれる。内容はすべて古鉄や古着の商人、質屋などのいわゆる八品商に関するものである。

第八冊（五七丁）。副題はない。記録年代は延享三年三月付から天保一二年九月二五日付まで。書上や願書その他が収録されている。内容はすべて寺社の境内町屋や門前町屋、寺領の取扱いに関するもの。江戸においては、延享二年閏一二月、寺社門前町屋の支配制度の改変が行われるが、この第八冊に収録された文書のはほとんどがこの制度改変に関わるもので、右に示した記録年代のうち、天保一二年九月二五日付の文書一点を除くと、他はすべて延享三年から寛延二年までの間の文書である。

第九冊（六一丁）。副題はない。記録年代は享保七年一月付から天保一五年三月一四日付まで。ただし収録文書の多くは天保年間のものである。町奉行所宛町役人返答書や種々の書上その他が収録されている。内容は雑多で、大川中洲の葭刈り取りや町火消人足給分、銭相場その他多岐にわたる。

第二〇冊（七四丁）。副題はない。この第十冊に収録されているのは名主役料書上の一点のみである。江戸町方の名主全員の姓名が記され、個々人の役料が筆墨料などとともに書上げられている。年欠だが書上末尾の記載から嘉永二年頃の記録であると推定できる。⁽¹⁾

第二一冊（八〇丁）。副題はない。記録年代は明暦二年一二月九日

付から天明六年四月付まで。町触や名主への申渡などを収録している。内容は雑多で、諸高札の写や人別、公事訴訟の取扱方、宗教者や浪人の取計方その他多岐にわたる。

第一二冊（六三丁）。副題はない。記録年代は明暦元年一月付から天保一四年九月付まで。町触あるいは町奉行所宛町役人返答書などを収録している。内容は、町役人の火付盗賊改方への対応、浪人の取計方、河岸地利用の規制、町内の番屋に関するものからなる。

第一三冊（六二丁）。副題はない。記録年代は享和三年正月付から天保九年五月八日付まで。町触や名主への申渡などを収録している。内容は雑多で、町役人の火付盗賊改方への対応、金銀出入の取計方、宗教者の借地借宅、建築規制、帯刀人による町方での刃傷の際の処置、日傘使用禁止その他多岐にわたる。

第一四冊（八〇丁）。副題はない。記録年代は宝永三年正月二日付から文政一一年正月付まで。町触や名主への申渡、名主同士の申合、願書その他を収録している。内容はすべて火消に関係する。火事の際の検使や火元吟味、火消人足その他に関する諸書類である。

第一五冊（九五丁）。副題はない。この第一五冊は町火消に関する二点の記録からなる。二点とも年欠である。ひとつは江戸町方全域の町火消各組の人足数や受持ち区域の書上であり、纏の図が添えられている。もうひとつは本所・深川地域の町火消の南組・中組・北組の人数や頭取名前、備品その他の書上である。前者の書上には組の纏の一部更新を記録する掛紙が二枚貼つてある。更新時期は弘化二年と弘化三年である。したがって、この書上の内容自体は弘化二年以前のものであること、および『重宝録』第一五冊が最初に作成されたのも弘化二年以前であることが明らかである。また『重宝録』第一五冊は弘化

二年、同三年の時点で実際に有用な書類として扱われており、そのため、それらの時点において掛紙を添付することによって収録情報の更新が図られたと考えられる。

第一六冊（九四丁）。「町火消之部」という副題が表紙に記入されている。記録年代は寛政九年一〇月付から天保一四年二月二六日付まで。町触や名主への申渡、名主同士の申合、町奉行所宛町役人返答書、願書その他を収録している。内容はすべて、副題どおり、町火消に関するものである。江戸町方全体を対象とした火消人足関係の規定なども一部含まれているが、多くは深川南組の火消人足差出方や同組の幕府船藏への欠付に関する文書である。

第一七冊（一七五丁）。副題はない。記録年代は「慶長年中」から天保四年七月二日付まで。原則として編年体で構成されている。ただし、年欠史料だが「市中取締懸」の名主「三九郎」・「市郎右衛門」・「理左衛門」が「一〇月二三日付」で作成した文書が冊の中途に収録されている。「市中取締懸」は天保一二年一〇月（日付不明）に初めて設けられている。よって、この文書は、年月日の明記された文書の範囲に限って示した右の記録年代の下限よりも後年の、天保一二年以降に作成されたものであることは明らかである。また、天保一三年一二月以降、三九郎・市郎右衛門・理左衛門の三名主は、それぞれ石塚・鈴木・熊井の苗字を名乗ることが許されており、したがって、差出人の彼らが苗字を冠していないこの文書は、天保一二年あるいは一三年の一〇月二三日付である可能性が高い。こうした推定が及ぶ範囲では、この文書が第一七冊の中では一番年代が下った記録ということになる。この第一七冊には、町触や名主への申渡、町奉行所宛町役人返答書その他が収録されている。内容はすべて江戸の名主に関するも

ので、その職務や身分、格式などに関わる文書である。

第一八冊（二七二丁）。副題はない。記録年代は明暦三年三月一日付から享保一〇年一〇月付まで。ただし、年欠ながら時期がややくだった享保一一年四月二七日の記録を含む文書も含まれる。主として由緒書や町奉行その他幕閣が交わした書類などが収録されている。享保年間に作成された種々の由緒書がその大半を占める。由緒書の内容は、縣五郎作・町年寄の樽家・芝車町・三十三間堂・本石町時之鐘・本所時之鐘・芝居・新吉原・両国橋新大橋永代橋・本銀町土手・養生所・牢屋敷・非人溜および非人頭や穢多彈左衛門に関するものである。これら由緒書の他、町人脇差や町奉行支配惣人数高に関する書類が収録されている。

第一九冊（九九丁）。「小間之部」という副題が表紙に記入されている。副題どおり、江戸町方各町の小間の書上一点のみでこの第一九冊は構成されている。年欠の書上である。

第二〇冊（一二二丁）。「諸色之部」という副題が表紙に記されている。この第二〇冊に収められているのは、副題どおり、江戸における諸商品の入荷量その他の書上一点である。書上の末尾には「辰一月」というこの書上の作成時期が記されているが、その年代を確定することはできない。ただし、書上の中の「下り水油」の項に「近頃嘉永六丑年ハ壱ケ年下り油八万千百八十六樽差下候得共」云々と書かれている。「嘉永六年」以降で最初の「辰」はその三年後の安政三年である。したがって「辰一月」は安政三年一月である可能性が高いのではない。

第二一冊（一四〇丁）。この第二一冊は、①「御改正箇條」（四五丁）、②「火付盗賊博奕改本役加役書記」（三四丁）、③「一四代將軍

御大札書面」（二三丁）、④「慎徳院様薨御書記」（四八丁）の四部で構成されている。①は天保一二年五月二日付から天保一五年二月六日までの間の天保改革にともなう申渡・御触の題目を編年体で箇条書きしたもの。②は火付盗賊改役の沿革を箇条書きしたもの。同役任免の記録も収められているが、最新の記録は嘉永六年六月一七日のものである。③は「將軍御大札」に関わって名主たちや町奉行所あるいは町年寄役所の間で交わされた諸書付などからなっている。嘉永六年七月二三日付から同年一月一日付までの記録であり、時期からみて「將軍御大札」とは徳川家定の將軍宣下儀式のことと考えられるが、その場合、表題に問題がある。家定は一三代將軍であり表題の「一四代」は誤りである。なお、①から④の表題は第二一冊に収録された四つの部のそれぞれ扉部分に記されている。右のような誤りが生じた背景として、將軍家定の時代からある程度隔たった後世にこの表題が付され『重宝録』第二十一冊が成立した、といった事情などを想定することも可能だが、この点は検証の材料を欠く。④は、一二代將軍家慶の死去にともなう諸儀式に際して、名主たち、町年寄役所、町奉行所などの間で交わされた諸書付を収めている。嘉永六年七月二日付から同年一月二七日付までの記録である。ただし、この「慎徳院様薨御書記」の末尾に安政五年八月八日付の加筆がある。この加筆については後で検討する。

第二二冊（一三二丁）。「町会所撰要」という副題がある。記録年代は寛政五年七月付から天保三年一〇月二日付まで。書上や町役人などへの申渡その他を収録している。内容は、副題どおり、町会所関係のものである。町会所への諸申請の雛型なども収録されている。

第二三冊（一六八丁）。「町会所撰要」という副題がある。記録年代

は寛政四年五月二日付から文政三年五月一〇日付まで。ただし、年欠の文書（申請書類の雛型）に文政五年正月の記事が注記されている。収録文書の形式や内容は第二二冊と同様である。

第二四冊（一四六丁）。「町会所撰要」という副題がある。記録年代は寛政四年八月付から天保三年一月二五日付まで。収録文書の形式や内容は第二二冊と同様である。

別冊その一（一八七丁）。表紙には「重宝録」という表題の下に「深川筋川々御浚書留式冊之内一」と記されている。第一冊から第二四冊までの表紙に記されている通しの冊番号はこの冊には振られていない。記録年代は嘉永二年一月一九日から同年十二月二〇日まで。

深川地域の水路で実施された川浚普請の日記（ただし日記は嘉永三年七月一九日から同年十二月二〇日まで）が主体で、一部普請仕様書などを含んでいる。日記の中には、普請場所に出役した町奉行所役人や名主の名前、作業の記録の他に、普請請負人や名主、町奉行所などの間で交わされた文書の写などが収録されている。

別冊その二（二〇〇丁）。表紙には「重宝録」という表題の下に別冊その一と同じく「深川筋川々御浚書留式冊之内一」と記されている。本来は「式冊之内二」と記入されるべきであろうが、このように書かれている。単純な誤記か、あるいは別の理由があるのか、不明である。別冊その一と同様、表紙には通しの冊番号がない。記録年代は嘉永四年一月一八日から同年一月晦日まで（ただし日記の範囲は嘉永四年一月一八日から同年一月二二日まで）。別冊その一の続冊にあたり、記録の形式や内容も別冊その一と同じである。

以上、『重宝録』全二六冊の概要を紹介した。ここで注目すべきは各冊の内容や体裁が不統一な点である。先にもふれたが、各冊の分量

に関して、最も厚い冊は最も薄い冊の四倍以上である。また、表紙に「地面之部」・「町火消之部」などといった副題が記入されている冊と副題のない冊とがある。冊ごとの内容についても、第九冊などが典型例だが、収録された文書の扱う題材が雑多でばらばらなものもあれば、それに続く第十冊のように、名主役料書上の一点だけからなる冊もある。他方、多くの点数の文書を収録するもののそれら文書がすべて特定の主題に関係している場合もある。例えば第一四冊はすべて町火消関係の文書で構成されている。こうした「重宝録」の構成における不統一性について、同じく江戸町方の名主文書とされている『類集撰要』（国立国会図書館蔵本）全五十冊と比較してみる。『類集撰要』も、『重宝録』同様、町触や町奉行所宛の町役人返答書などの写を主体に構成されている。しかし、各冊に「地面之部」・「町入用」・「諸職人」・「髪結」その他の主題が、ひとつ、あるいは複数割当てられていて、それぞれの冊にはそれらの主題に関連する文書がまとめて収録されている。これに対して『重宝録』では、『類集撰要』と同様に、ある主題に関する文書群がひとつの冊、あるいは連続する数冊にまとめられている場合もあるが、それと異なる場合もあり、例えば穢多や非人の由緒書が第二冊と第一八冊の両方に収録されていたり、火消盗賊改に関する文書が第二二冊・第一三冊および第二一冊に含まれていたりもする。これらと同様の事例は『重宝録』において多々みられる。それに対して『類集撰要』の場合、特定の主題に関連する文書はひとまとめにされておき、『重宝録』のように不連続な複数の冊へばらばらに収められるようなことはない。つまり、『類集撰要』にみられるような、扱うべき主題を予め各冊に振り分け全体を順序立てて編集するという全冊一貫した編集意図が『重宝録』には見出せないのである。

右に指摘したような『重宝録』の不統一性からは、次のような仮説を導き出せるのではないだろうか。全二六冊からなる『重宝録』の各冊は性格を異にするいくつかのグループに分類できる。それぞれのグループは別個の編集方針のもと作成された。こうして別々に成立したグループが、その後、ある時点で一括され『重宝録』が出来上ったのではないだろうか。

一部の冊の間で確認できる作成年代の差もこうした仮説を傍証しているのではないか。先の冊別の概要紹介では各冊の記録年代を示した。いうまでもなく、この記録年代だけからその冊の作成年代を確定することは不可能である。例えば、享保年間に作成された文書の写を収録している冊についてはそれが享保年間に成立した冊であることだけは明らかだが、そこからさらに詳しく作成年代を絞り込むことはできない。このように『重宝録』各冊の作成年代をいちいち判定することとは難しいが、『重宝録』各冊の作成年代それぞれにおいてある程度の違いがあることを示すごくわずかな手がかりもある。第一五冊は、概要紹介で述べたとおり、弘化二年以前に作成されたことが明らかだが、それに対して、別冊の二冊は嘉永年間に成立したことが確実である。第二〇冊は安政三年一月以降の成立である可能性が高い。第二一冊は嘉永六年十二月以降の成立であることは明らかである。同冊の末尾には、後年の加筆である可能性も大きい。安政五年八月八日付の文書の写が載せられている。このように冊によって作成年代に差があることや全冊一貫した構成スタイルを欠くことなどは、本来別々の契機で別々の時期に成立した冊がある時点で一括され、そうして『重宝録』が成立したことを示すと考えられるのである。

この仮説を前提にするならば、『重宝録』の編者が誰であるのかと

いう問題の検討作業は、いきなり『重宝録』全体を対象として行うのではなく、個別の冊を対象とした検討から出発して、同類の冊ごとのグループ分けを試みつつ、それぞれの冊やグループごとでその編集意図などを探る必要があるだろう。次章以降においてそうした作業を進めることにする。

二、『重宝録』と熊井理左衛門

最初に『重宝録』全二六冊から第一冊を取り上げて体裁や内容を検討し、その結果を定規にして他の冊の性格やその編集意図についても考察する。

『重宝録』第一冊は、先の概要紹介で述べたとおり、元禄一四年九月五日付から天保一三年五月二〇日付までの文書七四点（うち一点は年欠）を収録している。その中で最も年代の下った天保年間において作成された文書は一八点ある。これらの文書の差出人について注目すべきは、深川熊井町名主である理左衛門（熊井理左衛門）が町奉行所へ差出した文書が六点にのぼることである。残り一二点のうち九点は理左衛門以外の人物が差出人となっている文書だが、差出人は様々に特に固定していない。これについては後で分析を行う。さらに残る三点のうち二点は「市中取締懸名主共」の差出である。もう一点は写し取る際に差出人が省略されており不明である。このうち「市中取締懸名主共」差出の二点は町奉行所役人へ提出されているが、後で述べるように、実際には、理左衛門単独、あるいは理左衛門を含む若干名の名主たちから町奉行所役人へ提出された可能性がある。つまり天保年間文書一八点のうち九点は熊井町名主理左衛門がその作成・提出に

携わっている文書か、もしくは携わった可能性のある文書である。このように『重宝録』第一冊が収録する天保年間の文書においては、差出人として理左衛門が頻出し、他方、理左衛門以外に頻出する差出人はいないのである。

まずは理左衛門差出の文書について、そのうちの一例を引用し検討する。丸括弧内は筆者による注記である。

史料①⁽⁶⁾

(かぎ括弧内は朱書の見出し)

「天保一二丑年駿河守様御番所御年番安藤源五左衛門殿被尋」

乍恐以書付申上候

町屋鋪御武家方抱屋鋪致候節其外女名前沽券代等之訳、町役人心得方御尋二付、左二奉申上候、

(六箇条の尋答の引用を略す。)

右密々御尋二付、町役人心得方奉申上候、以上

丑九月

熊井町

理左衛門

概要紹介で述べたように、史料①を収録する第一冊には「地面之部」という副題が付され、土地の権利や売買などに関する文書が集められている。史料①は、町人地での武家の抱屋敷において、あるいは町人が複数の町屋敷を所持する場合その町屋敷の一部においてみられる、女名前の沽券代(沽券の代理名義人)その他の扱いについて説明したものである。冒頭に朱書された見出し部分と本文冒頭部分によれば、南町奉行矢部駿河守配下の年番与力である安藤源五左衛門から、そうした沽券代その他に対する「町役人心得方」を「密々」で尋ねら

れた理左衛門が史料①の返答書を作成、提出したことがわかる。宛所は写されていないが、「御尋」を行った与力安藤源五左衛門あるいは町奉行所(駿河守様御番所)に宛てて理左衛門は提出したのである。

ここで朱書きの見出しについてさらに検討を加える。『重宝録』全二六冊のうち、一八冊には原則として文書ごとに史料①のような朱書きの見出しが記入されている。見出しが記入されていない八冊(第一〇冊・第一五冊・第一八冊・第一九冊・第二〇冊・第二一冊および別冊二冊)は、長大な書上や由緒書、日記などを一点あるいは数点のみ収録する冊である。これらの冊は、そうした構成ゆえ、検索などの際にも特に細かな見出しは必要なかったとも考えられる。見出しが記入されている一八冊において、それら見出しは、右に述べたように各冊が収録する文書の一点ごと、あるいは内容の関連する文書数点のまとまりごとに付されている。ただし、関連する文書数点が連続して収録されている場合でも、箇所によつてはそれら関連文書の一点一点にすべて見出しが付されている例もあり、見出しの付し方において一貫して厳密な基準が守られているわけではない。見出しの内容についても、史料①の見出しのように、作成年代と併せてその文書が作成・提出された事情に言及する場合もあるし、単に年代のみを記す場合もある。そうした「揺れ」があるものの、収録文書の整理や検索のため編者が付していったのがこの朱書きの見出しであろう。

第一冊に収録された理左衛門差出文書に関する検討作業を続ける。以下、アからオとして、史料①以外の天保年間における理左衛門差出文書に付された朱書きの見出しを引用する。丸括弧の中には文書本体に記された作成年代などを記す。⁽⁷⁾

ア「天保十一子年閏正月南御番所於御吟味所佐久間健三郎殿被尋」(文書本体も「閏正月」付であるが、実際に閏正月があるのは天保十二年であり、見出しの「天保十一子年」は誤りであろう)。

イ「天保十二丑年駿河守様於御番所安藤源五左衛門殿被尋」(「丑七月廿四日」付)。

ウ「天保九戌年於北御番所谷村源左衛門殿尋」(「天保九戌年八月」付)。

エ「天保十三寅年」(「七月六日」付)。

オ「右書付甲斐守様御番所二而御渡、左之書面差上」(「寅九月一日」付。見出しが記す「右書付」も収録されており、そちらの見出しには「天保十三寅年後藤三右衛門申立趣意」とあるので、この「寅九月一日」の「寅」も天保一三年であろう。「甲斐守様」とは南町奉行鳥居甲斐守である)。

このうちエの見出しは、内容が関連する四点の文書をひとまとめにしてその最初に付されている。その四点うちのひとつが理左衛門差出の文書である。これは寄付・譲渡された町屋敷を寺院が所持する場合の名義についての「町々元極御尋」に理左衛門が答えたもので、文書の内容から町奉行あるいは町奉行所役人からの「御尋」に対する返答書であると考えられる。つまり、史料①と右で見出しを紹介した五点との計六点からなる理左衛門差出文書は、すべて南北いづれかの町奉行所の「御尋」に対して理左衛門が差出した返答書である。

それ以外で第一冊に収録された天保年間作成の文書のうち二点は「市中取締懸名主共」差出の文書であり、差出人として理左衛門の名前は記されていないものの、その作成・提出に理左衛門が携わっていた可能性があることは先にも述べたとおりである。この二点の文書

に付された見出しは「天保十三寅年七月南於御番所市中御懸方尋」、「天保十三寅年五月南市中懸方尋」となっている。つまり、南町奉行所の市中取締掛の役人からの「尋」に対する「市中取締懸名主共」の返答書であるが、こうした文書作成の経緯は右でみた理左衛門差出文書の場合と同じである。また、後で理左衛門の経歴を紹介する際にふれるが、当時、理左衛門は市中取締掛名主の中で中心的役割を果たしていたと考えられ、それゆえこの二点の文書については、実際は、理左衛門単独あるいは理左衛門を含む若干名の名主たちが町奉行所へ提出した文書である可能性が大きいのである。こうした仮説を次の事例が傍証してくれる。第九冊に収録された「寅四月」付の「市中取締懸名主共」差出の文書に付された見出しには、「天保十三寅年四月南市中御掛江理左衛門上ル」と記されている。仮説どおり、差出に「市中取締掛名主共」と記された文書が実際には理左衛門から町奉行所役人へ提出されていることを確認できる事例である。

続いて、同じく第一冊に収録された天保年間作成の文書で理左衛門以外の人物が差出人となっている文書九点について検討を行う。なお、もう一点、この第一冊には差出人記載を欠く天保年間の文書があるが、これは検討の対象から除外する。問題の九点のうち四点は、深川石嶋町において一橋家が内実所持する町屋敷の扱いに関して石嶋町の名主が町年寄役所からの尋に対して提出した天保一三年九月付の返答書、一橋家の沽券代(代理の沽券名義人)の西葛西領千田新田の名主が町奉行所へ差出した天保一三年九月付の願書と請書、そしてこの一件をめぐって「佐野日向守・村田盛三郎」が町奉行遠山左衛門尉へ差出した懸合書からなる⁽⁸⁾。つまり、これら四点は、個別具体的な土地の扱いをめぐって作成された一連の関係書類である。また別の三点は、寄付

・譲渡によって寺院が町屋敷を所持することについて幕府の屋敷改と寺社奉行、町奉行の間で交わされた天保一三年六月付の問合書、懸合書である。⁽⁹⁾なお、これら三点において問題となっている寺院の町屋敷所持について町奉行所からの「御尋」を受けた理左衛門が提出した同年七月六日付の返答書がこれら三点に続いて収録されている。⁽¹⁰⁾さらに、通四丁目において寺院が所持していた町屋敷について同町の名主が「御尋二付取調申上」げた返答書一点も一緒に収録されている。⁽¹¹⁾最後の一点は、御金改役人の後藤三右衛門家族が町屋敷を譲渡した際の沽券状継書の案文他からなる書付である。見出しには「天保一三寅年後藤三右衛門申立趣意」とある。⁽¹²⁾なお、この件については前にもふれたとおり、南町奉行島居甲斐守からこの後藤三右衛門差出の「書付」を渡され「町屋鋪町並屋鋪を御用達之内江地面買取節、沽券状宛名認振并紙継之節認振等御尋」を受けた理左衛門が「寅九月一六日」付で返答書を提出している。⁽¹³⁾『重宝録』では後藤三右衛門の「書付」のすぐ後にこの理左衛門の返答書が収録されている。

以上、第一冊に収録された天保年間の文書のうち、理左衛門以外の人物が差出人となっている文書九点について検討を行った。まず指摘できるのは、前にも述べたとおり、差出人は様々で、理左衛門のように多くの文書の差出人となっている者は他にいないことである。そして、寺院の町屋敷所持に係る三点および後藤三右衛門の書付の一点は、それぞれ理左衛門差出文書と関連する文書であるため収録されていることがわかる。残り四点は一橋家の抱屋敷に関する文書であるが、これが『重宝録』第一冊に収録されている理由は次のように考えればよいのではないか。前に概要紹介で述べたように、この第一冊は土地の権利や売買手続などについての文書を集めている。その記録年

代は元禄一四年から天保一三年までと広い。ここまで特に分析を加えた天保年間作成の文書以外に、天保年間以前に作成された文書も四五点収録している。ここで詳しくは取り上げないが、これらは土地の権利・売買について出された町触や同じく土地の取扱いをめぐる様々な先例が集められたものである。一橋家の抱屋敷に関する文書四点もそれらと同じく先例として記録するため収録されているのではないか。ここまでの分析をもとにすれば、『重宝録』第一冊の内容構成について以下のようなことがいえる。天保年間以前、古くは元禄年間にまで遡って参照すべき法令や先例を集めた部分と、天保年間（この第一冊では天保九年八月から天保一三年九月まで）に熊井町名主の熊井理左衛門が町奉行所からの「御尋」に答えるべく作成した返答書とその直接的な関連文書とを収録した部分に大別ができる。

そこでさらに『重宝録』全二六冊についてそれぞれ、町奉行所宛の理左衛門差出の返答書を収録しているか否かを調べると、第一から第六までと第八、第九、第十一、第十六、第十七の計一一冊がこれを収録していることがわかる。本来であれば、第一冊と同様の分析をこれら一一冊全体で行ってその内容構成などを比較すべきであるが、本稿においては、各冊の収録文書の総数（a）、それを天保年間より前に作成された文書、年欠文書および天保年間に作成された文書の三つに分けた数（bとcとd）、そしてその中の天保年間作成の文書（d）をさらに、理左衛門が差出した文書、市中取締諸色掛名主または定世話掛名主が差出した文書、およびそれ以外の者が差出した文書に三分した数（eとfとg）を、表①として示すにとどめる。⁽¹⁴⁾一一冊の合計数に注目すると、天保年間作成の文書数（d）一一六点のうち理左衛門差出の文書数（e）が過半数の六二点である。これに理左衛門が作

成・提出に携わった可能性のある市中取締諸色掛名主または定世話掛名主が差出した文書数（f）を足すと八八点にのぼり、天保年間作成の文書の七六パーセントを占めることになる。理左衛門以外の者が差

表①理左衛門差出文書を含む冊の収録文書点数と内訳

	a	b	c	d	e	f	g
第1冊	62	45	1	16	6	3	7
第2冊	35	26	1	8	4	2	2
第3冊	29	14	7	8	4	2	2
第4冊	8	0	1	7	5	1	1
第5冊	9	1	4	4	1	3	0
第6冊	36	17	6	13	8	1	4
第8冊	12	11	0	1	1	0	0
第9冊	25	5	0	20	14	4	2
第12冊	28	18	0	10	4	2	4
第16冊	36	10	4	22	11	7	4
第17冊	166	158	1	7	4	1	2
合計	446	305	25	116	62	26	28

出した文書（g）の二八点において、具体的な分析は省略するが、差出人は様々で特に固定していない。

以上、簡略な紹介にとどまるが、先に第一冊に関して明らかにした内容構成上の特徴が表①に掲げた一一冊において共通している。すなわち、大別すると、天保年間に理左衛門が町奉行所からの「御尋」を

受けて提出した返答書とその内容に直接関連する文書を収録する部分⁽¹⁵⁾、および天保年間も含めそれ以前へも遡り法令や先例を集めて収録した部分、このふたつで各冊は構成されているのである。

それでは、ここで名主熊井理左衛門の経歴を別稿などに依拠しながら簡単に紹介する。文化四年六月、築地の上柳原町名主善三郎甥の平次郎は深川熊井町名主を代々勤める熊井理左衛門家の養子となる。文化六年七月、平次郎は理左衛門と改名し先代の跡を継いで熊井町名主に就任する。文政五年以降は深川佐賀町の支配も命じられる。天保二年、名主番組ごとに組内を取締る役目の世話掛名主が設置されるが、理左衛門は他二名の名主と共に一七番組世話掛に任命される。この世話掛任命に先立ち、町奉行三廻同心が各番組の任命候補者全員の「風聞」を調査しているが、その調査において理左衛門は「一鉢律儀二而年来無懈怠出精致し、事馴諸事入念相勤、当時専御用立候もの二有之」という高い評価を得ている。鈴木町名主源七は、天保一二年七月付で、市中取締に関する町奉行所宛意見書を作成しているが、そこで理左衛門について次のように述べている。「（町年寄の）三家共、御用談来申候堺町・熊井町兩人而已万端相用申候故、惣名主共一同気受不_レ宜_ニ・・」。つまり、町年寄が熊井理左衛門ともうひとりの堺町名主ばかりを重用するので、名主全員の「気受」が悪い、と源七は述べている。実際の「気受」の良し悪しは判断できかねるが、これら風聞書・意見書からは、当時の江戸町方における行政において、理左衛門の活躍が大変めざましいものであったことがうかがわれる。

天保一二年一〇月にいわゆる天保改革の推進を目的に設けられた市中取締掛名主、同じく天保一三年正月に設けられた諸色掛名主の両掛においても理左衛門の働きは目立ったようである。その出精ぶりが町

奉行鳥居甲斐守にも認められ、天保一三年一二月には、熊井理左衛門と牛込改代町名主石塚三九郎、小石川金杉水道町名主鈴木市郎右衛門の三名主には苗字が許され、「惣名主上席」という地位が与えられる。彼らは市中取締・諸色掛名主たちを統括する立場にあったと考えられる。正確な時期は不明だが、天保一四年六月から同年一〇月までの間に、彼ら三名主は各名主番組の世話掛を統括する定世話掛という役職にも就く。その他、理左衛門は人別掛の筆頭として、あるいは江戸市中の各水路で実施された川浚掛の筆頭としても活躍している。なお、天保一四年七月、褒賞として、理左衛門はその支配町域を深川熊井町他から江戸町方中心部の堀江町他へと移されている。元の支配町域は息子が引き継いでいる。

こうして天保改革の諸政策実現のため積極的に活動することによって一層その地位や権威を高めた理左衛門たち三名主であったが、水野忠邦の失脚で改革が頓挫した後も理左衛門たちの活躍は続く。川浚事業は嘉永年間まで続行される。さらに重要なのは嘉永四年の株仲間再興への関与である。再興の準備や再興後における商人仲間の間の利害調整など、理左衛門たちは重要な役割を果たしたのである。しかし、こうした理左衛門たち三名主の活躍にも安政四年一二月の彼らの失脚で終止符が打たれる。商人からの収賄を告発された三名主は名主役を取り上げられ入牢する。罪状が確定する前に石塚三九郎と鈴木市郎右衛門は牢死し、生き残った熊井理左衛門には江戸払いが申渡される。その後の理左衛門の消息は不明である。

以上が理左衛門の経歴の簡単な紹介である。本稿でみてきたとおり天保年間に理左衛門が町奉行所へ差出した文書が数多く『重宝録』に収録されているが、その数の多さについては、右に述べたような理左

衛門の経歴を考えると納得がいく。「専御用立候もの」としての理左衛門に対する町奉行所役人の評価は天保改革開始以前から高く、彼らは江戸町方の行政についての数々の「御尋」を理左衛門に対して行っていたのであろう。天保改革期における理左衛門の地位の上昇や権限の拡大は、町奉行所役人たちの理左衛門への「御尋」の頻度をさらに高めたと考えられるのである。

三、『重宝録』の編者について

以下、『重宝録』の編者について考察する。

前章でみたとおり、表①に掲げた『重宝録』の中の一一冊には名主理左衛門が差出人となつて文書の写が多数収録されている。こうした傾向の背景については、理左衛門自身がこれらの冊の編者であるとするは一番理解しやすいのではないだろうか。つまり、理左衛門が町奉行所へ諸々の返答書を提出した際に手元に残したそれら返答書の控や、様々な目的で参照した過去の町触や諸先例の関連文書などが書き写されて成立したのが、『重宝録』中のこれら一一冊ではないだろうか。

しかし、理左衛門以外の人物が編者となつて町触や先例とすべき諸事件の関連文書を収集してみたところ天保期の分についてはその当時活躍していた理左衛門の差出した文書が結果的に多く収録されるにいたつた、というようなことも可能性としては考えうる。

ここでそれら一一冊の中から第八冊を取り上げ、その構成に注目してみる。先の概要紹介で述べたとおり、この第八冊の収録文書はすべて寺社の境内町屋や門前町屋、寺領の取扱いに関するものである。収

録文書二点の内訳は、延享二年閏一二月付から寛延二年八月二四日付までの文書が一点で、残り一点は天保二年九月二五日付で理左衛門が深川永代寺門前に関する「御尋」を受けて提出した返答書である。宛所を欠くが、おそらくは町奉行あるいは町奉行所役人に宛てたものではないだろうか。さて、右で示したように、この第八冊の収録文書のほとんどは、延享二年閏一二月以降四年たらずの間に作成された文書である。詳細な分析は省略するが、これらは延享二年閏一二月に行われた寺社門前町屋の支配制度の改変にともなって新たに規定されたことの記録類である。この時期は江戸の寺社門前の編成において最も大きな画期であり、これら記録類は以後何かにつけて参照され重要な役割を果たしてきたのであろう。もし編者が理左衛門でないとするならば、これら延享・寛延に作成された一連の文書を収録した冊の中に、それから一〇〇年近くたった天保一二年の理左衛門差出文書を一点だけことさらに挟み込む理由が見出しにくい。しかし、編者が理左衛門であるとすれば、寺社門前に関して参照した延享・寛延の記録とやはり寺社門前に関係する自らの返答書の控とを同じひとつの冊に収録するという行為は、ごく自然なこととして理解できるのではないか。

この第八冊が顕著な例であるが、『重宝録』全二六冊のうち理左衛門差出文書を収録する一冊においては、それらの冊の構成内容などからして、理左衛門を編者とする考え方が最も整合的だといえる。

それでは、右で検討した一冊以外の一五冊（第七冊・第一〇冊・第十一冊・第十三冊・第十四冊・第十五冊・第十八冊・第十九冊・第二〇～二四冊および別冊二冊）について考察する。このうち特に取り上げるのは第二〇冊・第二一冊および別冊二冊である。それ以外の一

冊については編者について検討する手がかりが現在見出せていない。これら一冊の内容は第一章で紹介したとおりだが、例えば、第七冊は慶安元年二月二八日付から文化七年一〇月二八日付にいたる八品商関係の文書が編年体で収録されている。この第七冊の編者が理左衛門であったとしても特に矛盾する部分はないが、その一方で、理左衛門以外の編者であったとしても矛盾する箇所はない。同様のことが残り一〇冊にも該当し、編者に関して考察する手がかりを欠く。

ではまず第二〇冊に注目する。この冊は「諸色之部」という副題があり、内容は江戸における諸商品の入荷量その他を書上げた記録一点からなる冊である。作成年代は、第一章で述べたように、安政三年一月である可能性が高い。この書上には「江戸表諸色船運送入津陸付着荷高、密々御尋二付、左二奉申上候」という作成の経緯が記されている。「御尋」をしたのが誰か、この書上が誰に対して報告されたのかは記載がないが、取扱い内容からみて、町奉行あるいは町奉行所役人である可能性が高い。名主理左衛門は、先に経歴を紹介したように、この当時、諸色掛名主の代表的存在として活躍している。嘉永四年三月の株仲間再興前後の時期にも、諸色掛を代表して再興の方法や物価の動向に関する「御尋」を受け報告を行っていたことが『諸問屋再興調』などから判明する。この第二〇冊に収録された書上の作成者もこれと同じ役割を果たしているといえる。この第二〇冊の編者としても理左衛門が妥当する可能性が高い。

先に検討した理左衛門差出文書を収録する一冊、および右で注目した第二〇冊—以下これら一二冊を『重宝録』A群と呼ぶ—をみる限りにおいて、『重宝録』の編者は理左衛門であるという見方を強めざるをえない。本稿の「はじめに」で紹介した『江東区史』も、おそら

くここまでの筆者の分析作業と同様の観点から、『重宝録』の編者は相川町名主の新兵衛ではなく理左衛門であるという見解を示したのではないだろうか。そして筆者も、繰り返しになるが、この見解は『重宝録』A群においては正しいと考える。

しかし、『重宝録』全二六冊の編者が理左衛門である、という見解には問題が存在する。

別冊の二冊は嘉永三年・嘉永四年に深川の水路で実施された川浚の日記である。理左衛門は、先の経歴紹介において述べたとおり、江戸市中各所で川浚掛の筆頭をつとめており、この深川の川浚掛にも名を連ねている。その点では日記を書いたのが理左衛門であっても問題はないのだが、この深川の川浚掛には相川町名主の新兵衛も加わっている。別冊二冊の記録から、嘉永三年と嘉永四年の総作業日数は三一〇日間であることが分かるが、理左衛門が普請場に出勤するのは、普請開始直後や町奉行の見廻りがある日などが主で、合計三四日間にとどまる。これに対して新兵衛の出勤日数は二二五日におよぶ。日記自体、毎日記入するのではなく、後日になって数日分まとめて記入することもありと考えられるが、全作業日の記録を載せたこの『重宝録』の別冊二冊の作成者としては、理左衛門よりも新兵衛の方が蓋然性が高いのではないか。この点に関して、次のような記述も重要である。町奉行の見廻りに対応するため理左衛門（熊井）が掛名主へ廻状を出しているが、それについては次のように記されている。「一、明三日 御奉行様見廻御沙汰二付、熊井氏左之通廻状出」⁽¹⁷⁾。また、普請の作業中、水盛杭に掛名主が水面の位置を「墨引」したことについては次のように記されている。「筆者新兵衛認候事 是迄三本認」⁽¹⁸⁾。つまり、この日記の作成者は、理左衛門に対しては「熊井氏」というかたちで敬

称を用いているが、新兵衛に対しては敬称を付していない。先の出勤日数の差やこの敬称の有無をみると、『重宝録』別冊二冊の作成者は相川町名主の新兵衛である可能性が非常に高い。この別冊二冊を『重宝録』D群と呼ぶことにする。

次に第二一冊について検討する。この冊には、一二代將軍家慶の死去にともなう諸行事を嘉永六年七月二二日付から同年一月二七日付まで記録した「慎徳院様薨御書記」が収録されている。この中に出棺日の前日と当日における深川地域の名主の町内見廻りに関する「八月二日」付の「申合」の写がある。これには、見廻りをする名主（および見習か）一二名の名前が担当日別に書上げられているが、その際、例えば「田中市郎次」・「熊井理平次」・「相川新兵衛」などのように苗字がつけられている。苗字の使用が許されるのは、この「申合」が町奉行所などへ提出する書類ではなく、担当の名主たちが相互に確認するために作成されたものであるためと考えられる。また、この第二一冊には、これと同様の「公方様薨」における名主たちの見廻り分担の記録が「慎徳院様薨御書記」の末尾に加筆したようなかたちで収録されている。こちらには「右者慎徳院様御例之通、通達廉々有之、深川町々小名木川を境、（中略）左之通当番相立」という記述がある。「安政五年八月」のこの記録は將軍家定の葬儀に関するものである。右に引用した記述からは、先に収録してある「慎徳院様薨御書記」を参照しながら、この安政五年八月の見廻り分担などを作成し、その末尾にその記録を加筆したものと考えられる。ここで注目したいのは、これら記録が作成された嘉永六年や安政五年の時点で、理左衛門は深川地域において名主を勤めていないという事実である。前にも紹介したように、天保一四年七月以降、理左衛門は深川熊井町その他から、

江戸町方中心部の堀江町その他へと支配町域を移している。また、経歴であつたように、安政四年一月には名主役を取り上げられ失脚している。したがって、嘉永六年や安政五年に作成された深川地域の名主「申合」を収録したこの第二一冊の編者が理左衛門である可能性はきわめて低い。一方、編者が相川新兵衛であつても矛盾はないが、新兵衛が編者であることを確定する材料は欠けている。「申合」を行い深川地域で見廻りを分担する名主の誰かが編者である可能性は高いといえる。その限りでは、編者が新兵衛であつても問題はない。なお、見廻り分担者として名前のあがつている熊井理平次は熊井町名主である。理左衛門が堀江町名主となつた跡の熊井町名主は理左衛門の息子の小太郎が引き継ぐが、弘化二年四月に小太郎は病氣を理由に退役しその跡を理平次が継いでいる。理平次と理左衛門との続柄は不明である。理左衛門が編者ではないことがほぼ確実なこの第二一冊を『重宝録』Cと呼ぶことにする。また、編者について検討する手がかりを欠く冊を先に一一冊挙げたが、これを『重宝録』B群と呼ぶ。

以上、『重宝録』の編者に関する検討をまとめる。ここでは『重宝録』全二六冊を、A群（一二冊）・B群（一一冊）・C群（二冊）・D群（二冊）に分類してそれぞれ編者の問題を考察した。A群については熊井町名主（後に堀江町名主）の熊井理左衛門が編者である可能性が高い。D群については相川町名主相川新兵衛である可能性が高い。B群については編者が確定できない。理左衛門が編者であつても、あるいは新兵衛が編者であつても、それぞれ矛盾は生じない。C群については編者が理左衛門ではないことはほぼ確定的であるが、誰が編者であるのか確定できない。新兵衛を編者としても矛盾はない。

各冊の成立時期や成立経緯が異なり、最少でも熊井理左衛門・相川新兵衛という二名の編者の手になると考えられる『重宝録』のすべての冊には、現在、「相川蔵書」という蔵書印が押されている。第一章の冒頭で述べたように、『重宝録』と同じく東京都公文書館所蔵の『寛永録』・『書留』・『御触町触諸達』にも「相川蔵書」の蔵書印が押されている。また、『重宝録』を含めこれら史料では、表紙の右上に「式拾六」と墨で記入された和紙の貼紙が確認できる。こうした事実は、『重宝録』が、『寛永録』その他の史料と共に、ある時期相川家の所蔵する文書であつたことを示していると考えられる。このことを考慮すると『重宝録』の伝来や成立については次のような仮説が立てられるのではないか。まずは熊井理左衛門の下においてA群（あるいはA群とB群）が作成された。これらが何らかの事情で相川新兵衛の下に移されてきた。あるいは、理左衛門の下にあつたこれらの冊を新兵衛が書き写した可能性もある。一方、新兵衛によつてD群（あるいはB群とD群）が作成された。C群は新兵衛自身が作成するか、あるいは何らかの経緯を経て入手した。こうして新兵衛の下でA群・D群が一括され二六冊の『重宝録』が成立した。なお『重宝録』という表題を付けたのが誰なのか判断できない。

このように考えると、現在ある『重宝録』は新兵衛の下で成立したものであつて、その意味では、新兵衛こそが『重宝録』全体の編者であるとするべきかもしれない。しかし、本稿で述べたとおり、少なくともA群に関しては理左衛門がいわば原・編者である可能性が高い。

『重宝録』の史料性格を明らかにしてその利用価値を高めるためには、この原・編者としての熊井理左衛門の存在に留意する必要があるのではないか。

註

(1) 『深川区史』上巻(一九二六年五月)、二三頁。なお、この『深川区史』のものも含めて『重宝録』の編者問題や従来の見解については山際實氏のご教示を得た。

(2) 『江東区史』(一九五七年二月)、一六八頁。なお、引用末尾に『重宝録』の保存機関として記されている都政史料館は東京都公文書館の前身である。

(3) 曲田浩和「巨大市場江戸の変容」(斎藤善之編『新しい近世史3 市場と民間社会』新人物往来社、一九九六年四月)、二四〇頁。

(4) 高山慶子「深川狐師町の漁師」(『お茶の水史学』四五、二〇〇一年一〇月)、二三・四四頁。

(5) 後で本文中ふれるが、名主熊井理左衛門は、天保一四年七月、その支配町域を深川の熊井町その他から江戸町方中心部の堀江町その他へと移している。この書上では熊井理左衛門の支配町域は堀江町その他となっているため、これが天保一四年七月以降に作成されたことは確実である。

(6) 『重宝録』一(東京都公文書館、二〇〇〇年一〇月)六～一一頁。

(7) 同右書、三・六・一三・三五・四二頁。

(8) 同右書、三〇～三五頁。

(9) 同右書、三五～三七頁。

(10) 同右書、三七・三八頁。

(11) 同右書、三八・三九頁。

(12) 同右書、四一・四二頁。

(13) 同右書、四二～四四頁。

(14) 理左衛門を含む複数の人物が連名で差出した文書も理左衛門差出文書の中に含めた。なお、本文において後で述べるように、理左衛門は、天保一四年七月以降、それまでの熊井町その他から堀江町その他へとその支配町域を移し、肩書きも熊井町名主から堀江町名主へと変っている。ところで、文書点数を数える際、ひとつの文書の中に別の文書の全体あるいは一部が引用されたりする場合などは、これを文書何点と数えるか判断が難しいこともある。筆者とは異なる数え方もあるだろう。したがって、表①に掲げた文書点数はあくまでひとつの目安として考えてほしい。

(15) ごくわずかだが例外も含まれる。第六冊の末尾には深川地域の名主や名主見習・名主後見の任免に関する願書類が収録されている。

(16) 拙稿「天保改革と江戸の名主―都市支配機構と天保改革」(藤田覚編『幕藩制改革の展開』山川出版社、二〇〇一年一月)。「大日本近世史料」市中取締類集―市中取締之部一、二九九頁。『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』八(三一書房、一九九〇年一〇月)、一六〇・一六一頁。

(17) 『重宝録』別冊その一、第四五丁裏。

(18) 『重宝録』別冊その二、第八一丁表。